

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 嶋村 美和	提出日：平成 23 年 11 月 14 日
東南アジア研究所における職名：研究員（科学研究） * 右記の該当する職位に○をつけて下さい。（講師・助教・助手・ ポスドク ・博士課程学生・修士課程学生・学部学生）	
派遣先の研究機関等（調査を実施した国名・機関名（日本語で記載）及びカウンターパート名）： インドネシア，インドネシア科学院・生物学研究センター，Dewi M. Prawiradilaga * 派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所○をつけてください。（大学・ 研究機関 ・企業・その他）	
派遣先の研究機関等での職名： ポスドク研究者	
派遣期間： 平成 23 年 9 月 11 日 ～ 平成 23 年 11 月 10 日（派遣日数： 51 日）	
研究活動等の主な内容（該当する番号に○をつけてください。複数可） ①研究・実験 ②フィールドワーク ③セミナー ④ インターンシップ ⑤サマースクール等の講習 ⑥学会出席 ⑦単位取得等 ⑧その他	
研究活動の主な領域（該当する番号に1つ○をつけて下さい。） ①人文学 ②社会科学 ③数物系科学 ④化学 ⑤工学 ⑥ 生物学 ⑦農学 ⑧医歯薬学 ⑨総合領域 ⑩複合新領域	
派遣の概要（500～700字程度） <p>9月下旬に、カウンターパートのDr. Prawiradilaga, 調査対象地域における研究の蓄積があるガジャマダ大学森林学部の研究者、鳥類調査を行っている現地のNGOと話し合いを行い、本研究テーマ『インドネシアムラピ山における復興型資源利用システムの柔軟性と復元力の検証』と、ムラピ山周辺地域の状況、及び2010年の噴火前後に収集された既存データについて、情報収集と意見交換を行った。本調査に先行して、ガジャマダ大学森林学部のメンバーと共にムラピ山周辺の村落を一通り概観し、4集落における予備調査の後、調査地の選定を行った。9月下旬から10月下旬にかけて、ムラピ山南側斜面の村落にて鳥類相、住民の生業活動、被害状況に関する現地調査を実施した。調査では、噴火の被害を受けた村落と現在の仮設住宅にて、過去・現在の住民生活や、今後の復興についての住民の意見についてインタビューを実施した。調査結果は現地の研究者やNGOのメンバーに公表し、意見を求めた。</p>	
事業に係る研究成果（500～700字程度） <p>本派遣の成果は、調査活動以外にも、現地の研究者（植物・動物・資源保全など）、NGO関係者、社会系の調査員、及び村落住民との活発な話し合いを通して、本研究テーマ、研究の展開可能性について意見交換を行い、今後の共同研究のテーマや調査協力体制を含めた議論を行えた点である。ムラピ山南側斜面は2010年の火山噴火の被害がひどく、1m～2mの厚さに蓄積した土砂、岩、灰によって土壌が覆われている。今回の現地調査では、火山噴火後の初期段階における住民活動と鳥類相についてデータを収集することができた。本研究結果から、火山噴火に伴う大量の土砂流出によって植生更新が困難な土地であっても、住民による岩や砂の除去（販売のため）や、土壌露出部分への材木の植栽や牧草の刈り取りを通して、植生の再生・更新が行われ、鳥類相の回復を促すことがわかった。特に被災地では、以前から酪農業と材木生産が盛んであり、イネ科植物やアカシアの栽培を行っている。住民活動の再開によってこれらの植物が早期に侵入・定着することで、穀食性と雑食性の鳥類の生息を可能にしていることがわかった。</p>	